

〈論文〉

テレビドラマにおけるクリエイティビティの潮流

—『義母と娘のブルース』を中心に—

伊藤孝一

要約

日本のテレビ放送が始まって65年。テレビはメディア・コミュニケーションの中心的な役割を担い、人々に大きな影響を与えてきた。テレビ番組の中で、報道やスポーツとならぶ大きな存在であり、大衆文化を先導してきたのがドラマである。「生ドラマ」と呼ばれる生放送から始まり、VTR機器類の進化、山田太一・向田邦子・倉本聰という「シナリオライター御三家」やこの後の有能なシナリオライターの登場により、テレビドラマはエンタテインメントを担うコンテンツとして大きく進展してきた。しかし、この数年、「俳優が出演を拒否する」「視聴率が取れない」「バラエティ番組枠に変更する」などという声が聞かれ、テレビドラマは不振と言われている。ドラマは「時代を映す鏡」といわれて久しいが、いま醸し出されている人々の意識、あるいは時代の空気感とドラマの創造性＝“クリエイティビティ”¹⁾との関係に視点をおいて、現在のテレビドラマにおけるクリエイティビティについて論じる。

キーワード

テレビドラマ クリエイティビティ ストーリー キャスティング 時代の波動

I はじめに

本稿の目的は、テレビドラマの現在のクリエイティビティについて、人々の意識や時代の空気感との関連から考察することにある。

テレビドラマが不振と言われている状況のなかで、視聴率や話題性の観点から、この1年でのヒットドラマである『義母と娘のブルース』(2018年7-9月、TBS系)を取り上げ、上記の考察を試みる。TBS火曜夜10時枠としては『逃げるは恥だが役に立つ』(2016年)以来のヒットと言われ、定番の医療、刑事ものが各期1位を獲得するなかで、ホームドラマが健闘したことも話題である。研究調査にあたっては、文献調査に加えて、テレビCMやテレビ番組をはじめ、さまざまなメディアの企画・制作・演出に長年携わってきた実務経験を持つ筆者のネットワークによる情報を活用し、本稿のベースとした。

1

II ヒットドラマ『義母と娘のブルース』を支えるストーリーのクリエイティビティ

ここで取り上げるのは、TBSの『義母と娘のブルース』である。ぶんか社コミックス(ぶんか社)の桜沢鈴の同名4コマ漫画が原作で、義母と娘が出会ってから、それぞれが成長し自立するまでの10年間を描いている。

このドラマはバリバリのキャリアウーマンだった岩木亜希子(綾瀬はるか)が子持ちのサラリーマン宮本良一(竹野内豊)と結婚し、良一の娘・みゆき(横溝菜帆/上白石萌歌)の母として奮闘する物語。もともと余命わずかだった良一は第6話で天に召され、その後は高校生になったみゆきと亜希子を中心に物語が展開された。

第1話から最終話までのサブタイトルと視聴率は以下の通りである。

第1話	33才独身部長女子が突然の義母宣言!? 私は貴女に就職します!!	11.5%
第2話	最愛の娘の家出!? そして私は制服を脱ぐ	11.3%
第3話	夫が私に解雇通告!? これが私の生きる道…PTAを前面廃止へ	12.4%
第4話	私達は契約結婚か!? 最愛の娘と夏の奇跡…夫が決めた愛の形!	12.2%
第5話	絶体絶命! 夫が入院 夫婦で戦う大修羅場!! 私、再就職します!?	13.1%
第6話	さらば愛しき人よ! 最後に届く奇跡とは!? 私、背中で魅せます	13.9%
第7話	絶体絶命大ピンチ! 娘の抵抗と私の解雇!? 再就職先は倒産寸前	15.1%
第8話	就職先の最終決戦!! 完全復活の味は親の味 娘の意見承ります	15.5%
第9話	大決断な愛の告白!! 私の愛の最終選択か!? 二人で歩んだ9年間	17.3%
最終話	完結～さらば義母!! 愛が起こす奇跡の果て 私は娘を愛しています	19.2%

平均視聴率 14.2% (視聴率: ビデオリサーチ調べ、関東地区・世帯・リアル)

1. ストーリーをアレンジするクリエイティビティ

脚本を手がけた森下佳子は、主演の綾瀬はるかとは『白夜行』(2006年、TBS)、『MR. BRAIN』(2009年、TBS)、『JIN 一仁一』(2009年、2011年、TBS)など数々のヒットドラマを生み出してきた。なかでも白眉だったのが、綾瀬はるかの出世作となった『世界の中心で、愛を叫ぶ』(2004年、TBS)である。

原作は300万部のベストセラーで、映画版も興行収入85億円の大ヒット。森下が手がけたのは、既に一大ブームが起きている中でのドラマ化だった。ここで森下はすばらしいアレンジ力を見せた。原作、映画版とも主人公の恋愛だけにフォーカスを当てていたところを、「若い恋人たちとその家族の物語」として再構成した。それをシンボリックに表したのが、家族写真のシーンである。映画でも、死が近づくヒロインのために主人公は写真館を訪れるのだが、そこで撮ったのは2人きりの結婚写真である。対して、ドラマ版では家族を巻き込み、まさに家族写真のような集合写真が撮影された。映画版とドラマ版の違いを明確にしている。

『義母と娘のブルース』でも森下佳子のアレンジ力が効いている。原作では、偽装夫婦からスタートし、本当に心を通わせた亜希子と良一が病床で唇を重ねる。一方、ドラマでは病院から一時退院した良一を迎え、家族3人、初めて川で寝る。そこで亜希子と良一がくちづけを交わそうとするのだが、みゆきの寝相に邪魔されて断念し、その代わりに、夫婦そろってみゆきの頬にキスをする。家族3人でのファーストキスとなった。このアレンジは、家族の形を描くというテーマにぴったりで、実際に唇を合わ

せるよりもずっとロマンチックで微笑ましい。さりげなく、心に残るシーンとなった。アレンジする脚本術がドラマを輝かせている。

2. ストーリーを活性化させる台詞のクリエイティビティ

例えば第4話。綾瀬はるか演じる亜希子が冒頭からいきなり下ネタを繰りひろげたことが大いに話題を集めた。きっかけは、夜の営みはうまくいっているのかというママ友同士の会話を亜希子が聞きつけたことにある。「夜の営み」のキーワードを耳にした亜希子は眼を輝かせ、「その手のお話ならお役に立てるかと思存じます」と話に割って入る。さらに、人差し指を立てながら「はっきり言って得意分野かと」と堂々と宣言する。

近くから隠れて見ていた良一は面白がって笑うが、気づかない亜希子は、いままでどんな夜の営みをどのようにしてきたのか教えてほしいと尋ねる。そして、普通にやっていて立ち行かなくなったら、「穴を探すことをお勧めします」と、とんでもないテクニックをママ友に伝授し始めた。「うまくいかない時には、必ず見落とししている穴があるはずですよ」とあくまでもキリッと話す亜希子に、「見落としは無いと思うけど……限られているし」と圧倒され気味のママ友たち。キャリアウーマンとしての経験がママ友の役に立つと信じて疑わない亜希子は、見落としはなくても攻め方が甘かったのではないかと畳みかけ、「そこに攻め込むためには何らかのツール、道具が必要となるかもしれません」と自信満々と語った。

これは、「夜の営み」をビジネス上の接待と勘違いした亜希子と、夫婦の夜の営みについて話すママ友たちとの会話がうまい具合にかみ合ってしまう、亜希子の発言が下ネタに聞こえてしまったという一幕だった。それにしても、「男性の穴を道具で攻める」ことを連想させる台詞は効いている。普通なら視聴者に嫌悪されるような場面だったが、ネット上の反応を見る限り、以外にも好意的に受け止められている²⁾。

シチュエーション自体がお笑いコンビのネタのようだったため、笑うシーンとして最初から力を抜いて見られたということもあるだろうが、綾瀬の演技力によるところも大きいに違いない。清涼感あふれる外見の亜希子が、真剣にママ友のためを思って、あくまでもビジネス口調でどんどん切り込んだ提案を投げかけるものだから、いやらしさを感じるスキがない。それでいて、あの綾瀬はるかがとんでもない下ネタを言っているという面白さもある。

良一も最後には大笑いしながら物陰から登場し、亜希子の勘違いを正したが、きっと演じている竹野内本人も大笑いしただろうと想像できる。第4話の本筋とはあまり関わりのないシーンだったが、視聴者を大いに楽しませてくれた。

第4話が楽しかったのは、この冒頭のシーンがピーク。みゆきに「パパと亜希子さんは偽装結婚なの？」と核心を突く質問をされたのをきっかけに、これまで明かされていなかった良一と亜希子の結婚に隠された秘密が描き出された。良一は自分がスキルス性の胃がんで余命短いことを知り、「自分の死後に娘を守り育ててほしい」と亜希子に結婚を申し込んだのだった。理由は、「僕が知っている女性の中で一番たよりになりそうな人だから」。「仕事でも何でもない話をする相手がほしい」と感じていた亜希子は、以前から良一に注目していたこともあって、この唐突すぎる一方的なオファーを受けた。

良一と亜希子が偽装結婚なのは視聴者の多くが何となく気づいていただろうし、良一が病気であることも示唆されていたため、衝撃的な展開というほどではなかったが、あらためて明かされた2人の秘密は切ないものだった。

偽装結婚であるとはいえ幸せそうに見える2人だが、ここで脚本の森下佳子は、亜希子にそれを打ち砕く台詞を言わせる。

「普通の結婚というのは、いわば二人三脚のようなものかと。しかしながら私たちのそれは、リレーです」。

2人の関係性をこれ以上ないまでに的確に表現するとともに、良一が間もなくこの世を去ってしまうという、悲しい現実を容赦なく視聴者に突きつけている。

3. 登場人物を安易に増やさずに義母と娘の2人を描き続けるクリエイティビティ

例えば最終話。再就職したパン屋「ベーカリー麦田」の店主・麦田章(佐藤健)にプロポーズされた亜希子は、丁寧にその申し出を断る。亡くなった良一のことがいまだに忘れられず、何よりも十分に満たされているというのがその理由だった。そんな亜希子に、コンサルティング会社からオファーが舞い込む。ぜひともやってみたいと思う亜希子だったが、勤務地が大阪と聞いて断ってしまう。そのことを知ったみゆきは、自分が自立すれば亜希子にやりたいことをさせてあげられるのでは、と考える。そこで、大学受験に落ちたふりをして就職し、一人暮らしを始めることで亜希子を自由にしてあげようとする展開だった。

しかし、家に届いた合格通知書からみゆきの嘘を知った亜希子は亡くなった良一の上司(浅野和之)に感情を露わにする。

「私はみゆきの考えはどこか他人行儀に思えます。そうってしまうのは私の負い目なのでしょうか。私が本当の親なら、果たしてみゆきはそんな異様な気遣いをするでしょうか？ 私はそれが悔しいんです!!」

亜希子は子どもだったみゆきを思って、入院した良一は「骨折した」と嘘をついた。みゆきは亜希子のことを思って「大学受験に失敗した」と嘘をついた。相手を思いやる気持ちは一緒である。ついに、亜希子はみゆきと直接、対峙する。先に本音を吐露したのはみゆきのほうだった。

「人生なんて、いつ終わるかわかんないじゃん、って言ってんの。お母さんだって年もとるし、いつかは死ぬときが来るんだよ。これから時間はどんどん短くなるんだよ。だったらやりたいことやってほしいって思うじゃん。これ以上、私のためにばっか時間使わないで、って思うじゃん。私、もうお母さんから時間とりあげたくないんだよ！」

みゆきは、確かに良一の子だ。自分より他人を優先してしまう優しい心を持っている。涙ながらに話すみゆきに対して、亜希子は「私があなを育てた理由は、単なる私のエゴイズムです」と語りかける。

「要するに、あなを育てると口で言いながら、私はその実、満たされなかった自分を憐み、育て直していたんです。あなたは私に利用されただけ。私はそんなものです」

亜希子は自重するかのように言うが、亜希子の言っていることは多くの親が子どもに対して感じていることである。最初は自分の子という実感がわかなくても、だんだん愛情が増していき、やがて人は母になり、父になる。血のつながりがあっても、なくても、一緒のことである。

この登場人物を増やさない巧みな構成は、途中から見てもわかりやすいというメリットもあり、視聴率上昇の一因になったと思われる。

Ⅲ ヒットドラマ『義母と娘のブルース』を支えるキャスティングのクリエイティビティ

配役——これこそが、脚本と並ぶドラマのエンジンであり、生命線である。『義母と娘のブルース』の主な配役は次の通りである。

岩木亜希子→宮本亜希子——綾瀬はるか

冷徹で堅苦しい性格。能面のような表情で、事務的で格式ばった口調で話す。第6話で号泣してからは表情が豊かになる。第2話で退職するまで、トップシェアの金属会社「光友金属」で働くキャリアウーマン。第3話からは専業主婦として、良一の妻となり、みゆきの義母となる。第5話では、良一の休職を謝罪するため「桜金属工業」に行き、良一の代役として競合プレゼンを成功させる。第6話での良一の死後、自身の預貯金とデイトレードで生計を立てていたが、大学進学を望むみゆきに働く姿を見せるために「ベーカリー麦田」でパート勤務を始め、マネジメントも行う。第8話では、「ベーカリー麦田」のリニューアルオープンを提案する。第9話では、麦田から告白を受ける。

宮本良一——竹野内豊

みゆきの父。老舗の金属会社「桜金属工業」勤務。スキルズ性がんを患い、娘・みゆきを託すために亜希子と結婚する。みゆきの自転車の練習に付き添っていた時に倒れ、第5話で緊急搬送され入院する。亜希子以外には、脚の骨折で入院していることにした。退院してから2か月後に息を引きとった。享年46歳。

宮本みゆき——上白石萌歌(幼少期：横溝菜帆)

良一の一人娘。亜希子が義母になった時点で小学3年生。亜希子を「亜希子さん」と呼んでいたが、良一の通夜で亜希子が心から良一を愛していたことが分かってからは「お母さん」と呼び、徐々に思考や行動がそっくりになる。第6話後半からは高校3年生。成績があまり良なくて大学の進路で悩むが、第7話で亜希子の方針を理解する。第8話では、「ベーカリー麦田」のリニューアルに向け、「奇跡のパン屋」と題した紙芝居を作成したりして、さまざまな提案をする。その過程を経ていくなかで、経営に興味をもつ。

麦田 章——佐藤 健(幼少期：高橋 謙)

仕事が続かずに職を転々としている。第1話ではバイク便、第2話では花屋、第3話ではタクシー運転手、第4話ではリサイクル屋、第5話・第6話では葬儀屋として登場する。言葉の言い間違いが非常に多い。第6話後半では、父の跡を継いで「ベーカリー麦田」を経営しており、求人に応募してきた亜希子を雇う。それまで、いい加減な商売をしていたが、亜希子が来てからは店の立て直しに意欲的になる。第8話では、パンの改良に取り組み、亜希子や周囲の人々の協力を得て「ベーカリー麦田」をリニューアルオープンする。第9話では、亜希子に告白した。

宮本 愛——奥山佳恵

みゆきの実母で、良一の亡き妻。物語開始の3年前に他界した。

麦田 誠——宇梶剛士

麦田の父。「ベーカリー麦田」を経営していたが、長年苦勞した腰痛で店から離れ、現在は南甲府駅の近くに住んでいる。亜希子にパン改良の協力を求められるが、結局は麦田と喧嘩別れになり、亜希子に麦田への助言と「ベーカリー麦田」の再建を託す。

田口朝正 — 浅利陽介

亜希子の元部下。彼女に想いを寄せている。亜希子が退職した後の第3話では、亜希子がドン・キホーテで買ってきた警察官グッズを着て警察官になりすまし、運動会の警備をした。第5話では、競合プレゼンで「桜金属工業」側の亜希子が提案したプランのほうが低価格で優れていたことに落胆する。第9話では、バーで麦田と意気投合し、「ベーカリー麦田」を訪れて亜希子とも再会し、初対面だと思っていた麦田と以前から何度も会っていたことが判明する。

笠原廣之進 — 浅野和之

良一の上司。第6話の良一の葬儀の際、出棺間際の棺に語りかけ、亜希子が号泣するきっかけとなった。良一の入院時にピンチヒッターで入社した亜希子の優秀さを見込んで、彼の死後スカウトしたが、母としての務めを優先したい亜希子に断られた。最終話で、大阪のコンサルティングファームの話で亜希子を紹介する。

黒田大樹 — 井之脇海(幼少期:大智)

みゆきの小学校のクラスメイト。以前はみゆきを「ブス」呼ばわりしたが、実はみゆきに好意をもっていて、よく気遣いもした。みゆきに「二度と話しかけないで」と言われから彼女に近づけなくなる。良一の通夜で、みゆきと近づく機会はあったものの、そのまま父の転勤により転校する。9年後、高校生になったみゆきを見かけてから密かに見守っていて、気づいたみゆきから礼を言われたときに告白するが、一旦は断られる。第7話で、病気休学で1年遅れていることや薬品開発の仕事に就くために大学は薬学部をめざしていることをみゆきに明かす。また、あまり勉強が得意でないみゆきのために家庭教師をする。第8話では、麦田が「耳までうまいパン」を開発する際に、焼き加減等のデータを分析する手助けをする。

矢野杏奈 — 志村美空

みゆきの小学校のクラスメイト。大樹のことが好きなので、みゆきが仲良くしていることを快く思っていない。

矢野晴美 — 奥貫 薫

矢野杏奈の母。3人の子持ちで、10年以上PTA会長をしている。第3話の運動会の一件から亜希子と親しくなる。第6話後半では、スーパーマーケットで働いている。第8話では、「ベーカリー麦田」のリニューアルに協力するため、亜希子の家を訪れる。

下山和子 — 麻生祐未

「下山不動産」を経営している。そして「ベーカリー麦田」の家賃滞納に頭を悩ませている。第3話の運動会で、晴美にマンションを貸していたことを思い出し、晴美の情報を亜希子に伝える。良一の葬儀で、喪主としての事務的な務めしかしない亜希子にしびれを切らし、説教した。

6 友井智義 — 川村陽介

麦田の友人。映像関係の会社のAD。麦田からは「トモヨ」と呼ばれる。第7話で亜希子が作成した「ベーカリー麦田」リニューアル計画提案書の意義の高さを麦田に解説した。第9話ではADとして、話題のパン屋「ベーカリー麦田」をテレビ取材した。

主人公・岩木(宮本) 亜希子を演じる綾瀬はるかのカスティングが特筆される。日常生活でもスーツにパンプス、娘に敬語を使い直角に頭を下げる。メトロノームのように正確なリズムを刻む靴音。ビジネス用語を多用し、謝罪の時は地面に顔がめりこむほどの土下座。パン屋の兄ちゃん・麦田(佐藤健)に対しても、ビジネストークでプレゼン。キャラ弁をねだられたときも、キャラ弁を理解してなくて、

キャラクターを制作している会社の株価チャートを海苔でつくった弁当をもたせる。四角四面だけど、愛さずにはいられない人物造形である。そして終盤から、それまで硬かった表情が、徐々に明るい表情に変化する。それを演じきったのが綾瀬はるかである。

そして、みゆき役の横溝菜帆から上白石萌歌へのバトンタッチは見事である。唇をゆがめ、しかめ面をして考える癖がそっくりで、上白石の表情に、勝手に横溝の顔がオーバーラップしてくることが何度あったか知れない。演出家のセンスに起因すると思われるが、これほどまでに子役の引き継ぎを重視してキャスティングしたドラマを見たことがない。

全員が当て書きかと思えるほどの確である。丁寧なキャスティングの重要性をあらためて感じる。

IV この時代の空気感に呼応する創造性の構築

1. 主人公のキャラクターの個性化と物語設定のわかりやすさ

『義母と娘のブルース』は『ぎぼむす』と呼ばれ、放送終了後には「ぎぼむすロス」³⁾という言葉も生まれるほどの大ヒットとなった。ヒット要因として一番にあげられるのは、綾瀬はるか演じる義母の亜希子が、バリバリのキャリアウーマンで、表情に乏しくロボットのようなキャラクターとして描かれているところである。どこか不器用で、感情が出ない鉄面皮。キャリアウーマンの〈理屈〉や〈正当性〉を前面に押し出していく姿が、コミカルである。

こうしたサイボーグ系キャラは、漫画的でわかりやすく、言動も痛快さがあるため、周囲と化学反応を起こしやすい。能面のようなキャラクターが徐々に人間らしい感情を見せていく様子も、感動を呼ぶ仕掛けとして効果的である。

さらにドラマが始まる前のプロモーションで、これはこういうドラマですよという設定を短く説明することができるのも重要なところである。これは視聴者を納得させる以上に、テレビ局の企画会議で納得されるということも大きいと思う。「漫画原作で、バリバリのキャリアウーマンが契約結婚を機に家庭に入り、義理の娘との本当の親子のような関係性を築く話です」と一言で言い表せ、関心を抱かせる。

この作品に限らず、キャラクターや物語の趣旨をはっきりとさせるということは、ドラマに求められている大きな要素である。最初にこうした要素で人々を惹きつけるということは、この時代において、無視することはできないものである。

2. 「ながら視聴」層とドラマウォッチャーの双方を満足させる脚本

亜希子のキャラクターには、ロボットのようなということに加えて、バリバリのキャリアウーマンという設定もある。亜希子が発する、ビジネスに役立ちそうな格言に食いついているビジネスマン層がいる。『逃げるは恥だが役に立つ』にも共通する点であるが、ビジネスのスキームでものごとを語られると、信憑性を感じる層というのが確かに存在している。

ドラマというのは、自宅で見るという性質をもつ以上、何かしながらテレビを見る「ながら視聴」をする人も多い。こうした層には、はっきりとした要素で関心を抱いてもらうことが必要である。

それと同時に、「ながら視聴」ではなく、ドラマの奥に描かれたメッセージを読み取る、能動的に凝視する視聴者＝ドラマウォッチャーの存在も無視できない。キャラや派手な仕掛けだけでは、ドラマウォッチャーは満足しないのである。キャラや設定を利用しながら、そのキャラの心の変化を描いている。母と娘の交流に丁寧にアプローチしている。第8話のオチは「先代の味を継ぐ」「パンづくりには思い入れが大切」と実に正統派である。人情味ある、ハートウォーミングな展開である。

「風変り」と「古風」の掛け合わせこそ、このドラマのヒット要因ともいえる。風変りなドラマを設定すれば、目新しいが、とっつきにくい。コアなファンは生まれても、一般の視聴者に広く訴えかけることはできない。一方、「古風」「正統」なテーマだけでは地味で目立たない。いま「家族」のドラマを普通に作ってみても、かつて見たようなものにしかならないし、視聴者が「家族」の本質について考えるとも思えない。説教くさくてイヤ!などと言われてしまうかもしれない。

ところが、突然やってきた義母が「キャリアウーマン」そのものだったら、感情表現の苦手なロボットのような人だったら、その人を「母」と思えと言われたら…。あらためて「親子の関係ってそもそも何だっけ」という観点で、亜希子の役柄は異化効果を放っている。異化効果とは演劇用語で、日常と非日常の壁を破る効力。普段は当たり前と思ってスルーし、問い直もしない対象を、新鮮で見慣れない対象、思考を働かせる対象へと転換させる効果⁴⁾である。ドイツの劇作家・ブレヒトが生み出したもので、ドラマトゥルギー⁵⁾と密接に関係している。普段、空気のような「親子」というテーマを際立たせ、問い直すための有効な仕掛けとして、亜希子の異形な姿があるとすれば、このドラマは「風変り」と「古風」の掛け合わせによるドラマトゥルギーが大きな見どころの1つである。

「異色の掛け合わせ」あるいは「真逆の掛け合わせ」という観点からみると、TBSの公式ホームページには、桜沢鈴の原作を「義母と娘の邂逅を描いた、クスツと笑えて、ちょっぴり泣ける4コマ漫画!!」と紹介されていて、「笑う」×「泣く」とは真逆の掛け合わせ。「4コマという超短編」×「連続ドラマ化」も真逆。脚本の森下佳子は、原作に敬意を払って4コマのエッセンスの部分はなるべく残しつつ、その良さを生かし連続ドラマへと展開していると語っている。「キャリアウーマン」×「ダメ男」、「綾瀬はるか」×「佐藤健」。このドラマは、見どころがたくさんある。

3. 「継母(ままはは)」ではなく「義母(ぎぼ)」と呼ぶ新しさ

このドラマには、〈他にはない新しさ〉がある。その1つが「キャリアウーマンが義母になる」という設定。これまでのドラマにはない女性像である。現在は女性の社会進出が進み、女性の生き方が多様化しているが、それであっても極めて稀な「キャリアウーマンが義母になる」という設定に、当初は現実的ではないと思いつつも、現実としてワーキングマザーが身近にいることが当たり前になりつつあるなかで、徐々に興味をもった視聴者も多かったと思う。

新しい義母と娘の交流もポイントである。一般的にはマイナスイメージがある義母と娘の関係性の構築を新しい境地で描いたことは大きい。よく言われる「継母(ままはは)」ではなく、「義母(ぎぼ)」と呼んだことで、これまでのイメージを払拭する効果があったのではないかと思う。継母が実子でない娘を育てるという設定だと陰湿になりがちだが、義母がキャリアウーマンでロボットみたいなヒロインだから、母は清く正しく美しくあれというメッセージのドラマにならなかったのである。

8

4. 時代の波動〈ブルース〉とらえる眼力

義母と夫、娘との間に愛情が芽生えるというのは、家族のあり方についての訴求である。この家族は血が繋がっているわけでもないし、夫は娘を任せられる人を探していて、妻は他愛のない話ができる人を探しているという、利害の一致で始まった疑似家族である。疑似家族をはじめとして、家族のあり方を問うというのが、昨今のドラマの重要なテーマである。『逃げるは恥だが役に立つ』をはじめ、『カルテット』(2017年、TBS)、『隣の家族は青く見える』(2018年、フジテレビ)、『anone』(2018年、日本テレビ)など、次々と制作されている。映画でいえば、「カンヌ国際映画祭2018」でパルムドールを受賞した『万引き家族』も疑似家族を描いた作品である。

疑似家族が描かれるのは、日本の家族のあり方が変化のなかにあるということの表れであり、視聴者が〈当たり前〉と思われていたことに疑問をもっている、〈当たり前〉に縛られることを潜在的に窮屈に感じていることの表れである。これは家族に限ったことではない。アラサーだから急いで恋愛して結婚しないと周囲から取り残されてしまうことを煽るような作品は、これまでの〈当たり前〉に捕らわれている作品だから、そこから一歩先を考えなければ、視聴者は息苦しさ感じてしまう。これからのドラマには、〈当たり前を問う〉ことが重要なのではないだろうか。

勿論、〈当たり前〉のほうに安心するという人も世の中にはたくさんいる。『義母と娘のブルース』は疑似家族を描きながらも、その家族のあり方は、キャリアウーマンが家庭に入り、娘と夫を本当に愛していくという保守的な側面もある。『逃げるは恥だが役に立つ』との共通点であるが、伝統的家族の疑わしい部分には疑問を抱きながら、家族観として排除する必要のない部分は肯定している。こうした二重のメッセージによって、保守的な視聴者にも、保守的な価値観を疑っている視聴者にも受け入れられている。この結果が、高視聴率に結びついたと思われる。

みゆきは常に「母は自分を育てるために自分のやりたいことを封印してきたのでは」という申し訳なさを抱えていたが、最終話の終盤、亜希子と初めて率直な言葉で語りあい、お互いの気持ちの純粋さを知る。理想の母親像に迷いのあった亜希子は、自分がすでにそれを実現していたことに気づき、みゆきは亜希子に遠慮を感じる必要がなかったことに気づく。「義母と娘」が「母と娘」になった瞬間である。

「そういうのね、世間じゃ愛っていうんだよ」

「私、自分で子どもを産まなくてよかったです。あなたみたいな良い子は、絶対にわたしから生まれてきません」

最終盤の2人の台詞である。ここに、時代の波動＝ブルースが表現されている。孤独感から救い出すのは、〈無償の愛〉である。一見すると満たされているように見えるが、現代社会の中で誰もが陥りがちな孤独。そんな時代の空気感と呼応するのがブルースであり、そんな波動が母からも娘からも流れている。それぞれの孤独の向かう先にあるのが、〈愛〉。幸せの価値が見えにくくなっている現代だからこそ、亜希子とみゆきが放つ波動＝ブルースが幅広く共感を得たのではないかと思われる。

時代の空気感と呼応する眼力こそが、ヒットドラマをつくる礎である。

V おわりに

時代の空気感やこれまでにない新しさの観点から、現在のテレビドラマのクリエイティビティの潮流やヒット要因について、筆者なりに回答を提示した。

ネット上では、評価の声が数多く寄せられた⁶⁾。

「綾瀬はるかがいつもとは違った役で新鮮。佐藤健が朝ドラとは違った雰囲気ですごくよい」

(40代・女性)

「綾瀬はるかのハキハキとしているが、間をもったしゃべり方など、几帳面な役を上手くこなしていると思う。」

(50代・男性)

「綾瀬はるかの役は感情のなさそうな役柄なのに、考えていることがわかる」

(30代・女性)

「綾瀬はるか演じる義母の一途で不器用な生き方が、見ていてジーンとくる」

(40代・男性)

このドラマがヒットしたのは、『逃げるは恥だが役に立つ』のように新しい家族の姿を描いた点であるが、偽装結婚というテーマ自体は決して目新しいものではない。桜沢鈴による原作は9年も前から着手した題材であり、ドラマが共感を得たのには、別の理由がある。ドラマの中で繰り返し出てくるフレーズがある。

「奇跡だ！」

良一は自販機のルーレットで2回連続「777」を当て、ガッツポーズをつくって大喜びする。また、電車で向かいに座っている人たちすべての靴が白だったり、1枚の物件チラシがめぐりめぐって最終的に購入希望者にたどり着くなど、そういう「奇跡」が見る人の心を温かくさせる。この日常に根ざした、人肌感のある世界観が、2018年の空気にフィットした。

闘病という良一の大きな事件はあるものの、描きたいのはあくまで悲劇ではなく、日常である。娘との初めてのお買い物であったり、PTAのイザコザであったり、生活の延長線上にドラマを置いている。間口の広いテレビドラマだから、エンタメ性を高めるためにもキャラクターやストーリーにデフォルメは利かせているが、メッセージに過剰さがない。そこが、独特の心地よさを醸成している。

家族の死別を描きながら、ウエットになりすぎず、ふんわりとした軽やかさを内包している理由は、悲劇ではなく、日常を描くという美学に収斂されている。この創作スタンスこそが、ヒットの源である。

クリエイティビティは、テレビドラマの根幹である。時代の空気感や波動から、テレビドラマを注視し、考察を続けたい。

注

- 1) 本稿においてはメディア・コミュニケーションにおけるコンテンツの創造性を指す。
- 2) TBS『義母と娘のブルース』HP ファンメッセージ http://www.tbs.co.jp/gibomusu_blues/bbs/ 2018年9月25日アクセス
- 3) 『ぎぼむす』綾瀬はるか、伊集院光ラジオで最終回に“ロス”を告白 http://www.excite.co.jp/News/cinema/20180918/Crahkin_5905103.html 2018年9月25日アクセス
- 4) 岩淵達治『プレヒト 戯曲作品とその遺産』紀伊國屋書店、1982、p.21
- 5) 劇術・戯曲作法などと訳されているが、このことばの本質的な内容は、単に技術・技法などということよりはるかに複雑で、他のジャンルの文学・芸術作品に対して、戯曲が戯曲である構造上の理由、ドラマがドラマとして成立するための本質的条件を意味する。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『演劇百科事典第4巻』平凡社、1961、p.204
- 6) TBS前掲HP 2018年9月25日アクセス

10

参考文献

- 岩男壽美子『テレビドラマのメッセージ 社会心理学的分析』勁草書房、2000
岩淵達治『プレヒト 人と思想』清水書院、2005
今野勉『テレビの青春』エヌティティ出版、2009
重延浩『テレビジョンは状況である 劇的テレビマンユニオン史』岩波書店、2013
竹内郁郎『マス・コミュニケーションの社会理論』東京大学出版会、1990